

やはりダンジョンに騎
空士がいるのは間違っ
ているだろうか？

ハイ！ゼエン！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がついたらダンジョンにいた私（ジーター）

ヘスティアからベル・クラネルが強くなるまでサポートして欲しいという依頼をされる。

みんなのところへ帰らなくちゃいけない。でも困っている人を見過ごせない。

これは眷属の物語【ファミリア・ミス】と遥かなる青の物語【グランブルーファンタジー】が重なりあう物語

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
25	15	8	1

第1話

「…うん…あれ?…(こ)こ(ど)こ?」

目を覚ますと薄青色の壁に囲まれていることに気づく。壁や地面に凹凸があり少なくともどこかの部屋でないことがわかる。

「確か…古戦場が終わって祝勝パーティーして…それで」

古戦場、正しくは星の古戦場。眠りから目を覚ました星晶獣達と戦うために騎空団が寄せ集められ、どの騎空団が最も星晶獣を倒すかの勝負を行う。

その結果私達の騎空団は見事勝利し団員のメンバーでパーティーを開いていたはずだった。

しかし周りに見える景色はどう見ても洞窟にしかみえなかった。

「まさかとは思うけど…お酒飲んで酔っ払って変なところ来ちゃったのかな?」

そうだとしたらまずい。今は装備を全て外していて仲間もいない状態だ。こんな状況を襲われれば一溜りもない。

『ほあああああああああ!!』

誰かの叫び声が壁に反響して聞こえてくる。自分の後ろからだった。おそらく、とうか確実に誰かが魔物に襲われているのだ。しかし今の私は武器も仲間もない。

「でも困っている人を見過ごすなんてでき無い!」

私は叫び声の聞こえた方向に向かって足を走らせた。

☆

叫び声に向かって走り続け、ようやく少し開けた場所に出る。

「ヴォウン!!」

見えたのは牛頭の魔物が白髪の少年を襲っているところだった。

（大変!早く助けないと!でも…）

今の私には武器もなく攻撃が通じるかもわからない。あるのは自分の体だけだ。

（そうだ!体を使って戦えばいいんだ!なら!）

「ウエポンバースト!捨て身の型!」

体の気を集中させ力を入れる。自分の体のそこから力が湧き出てくる。

そして防御を考えず、攻撃だけを考えて捨て身の型にはいる。

「はああああ！」

力がみなぎるのを感じ牛頭の魔物に攻撃をしようとする。しかし突然現れた金髪の美女によつて魔物は切り裂かれ少年は助かった。

金髪が美女が少年に手を差し出そうとした時、その後ろから新たなる牛頭の魔物が不意打ちを仕掛けようとしているのが見えた。

「危ない!!」

地面を蹴り魔物との距離を縮める。完全に間合いに入った状態になる。

「炎鳴流奥義！極炎紅脚！」

走りの勢いを使って回し蹴りを胴体に食らわせ、さらに2発目を鎖骨に叩き込み、そして3発目が頭部に入り頭部が弾け飛んだ。着地し、しっかりと魔物が倒されたことを確認する。

なんとか魔物を倒し白髪の少年と金髪の女性を助けることはできた。

改めて見ると白髪の少年は魔物の血を浴びて上半身は真っ赤に染まっていた。それと対照的に金髪の女性は誰が見ても美人だというような顔つきだった。

「大丈夫？怪我はない？」

「だっ——」

「だっ?」

「だああああああああああああああああああ」

真つ赤な少年、基い白髪少年は急に立ち上がりどこか走り去ってしまう。それに驚き体が固まってしまう。

「ちよ、ちよつとまってよー!!」

ハツと我に返り、また魔物に襲われては危ない思い、洞窟を駆け抜け少年を追いかける。

なんとか少年を見つけもう一度声をかけるものの混乱しているのかそのまま走っている。

無理矢理にでも動きを止めようと足を早めて距離を狭めるが、少年が途中で右へ左へと曲がり階段を登ったり、ついていくのが難しくなってしまう。そしてついには見失ってしまった。

「あーもう!どこいったの?」

おそらくこつちだろうと、とにかく足を動かして少年を追いかける。そうしているうちに出口のようなところを見つける。

「もしかしてあの子もこの洞窟を抜け出したのかな?」

念のために外に出て確認を試してみる。

見えたのはポート・プリーズ諸島で見たような活気溢れる街だ。そんな街を駆け抜ける真つ赤な物体がみえる。間違いない、さっきの少年だ。どうやら無事に街に戻ったみたいだった。しかしここであることを思いだす。

「…あの女の子置いてきぼりにしちゃったなあ…」



「あの、それで、ヴァレンシユタインさんのことを……」

「うーん…ギルドとしてはあんまり話ちゃいけないから言えるのは公然になってるものくらいよ」

アイズヴァレンシユタイン。「ロキ・ファミリア」の女剣士でありトップクラスの腕前を持ち二つ名が【剣姫】である。

それだけでなく10人中10人が美女というほどの美女である。それ故に下心をもつて近づく人間が多い、がすべて粉碎されついには千人切り達成されたらしい

「あのーヴァレンシユタインさんの…その趣味とか好きな食べ物とかって……」

「な〜く〜ベル君。もしかしてアイズヴァレンシユタイン氏のこと好きになっちゃたの？」

「……その、はい」

「うーん。まあその気持ちはわからなくもないけどねえ……まあ趣味も好きな食べ物も聞いたことないね」

「うう……やっぱりそうですか」

「それに一応言つとくけど彼女は【ロキ・ファミリア】で君は【ヘステイア・ファミリア】なんだからね」

「それはわかつてますけど……」

「別に強く当たるともりはないよ。でも現実を見据えないと何にもできないんだからね」

「……はい」

「ほらほら、そんな辛気臭い顔しない。用がなくなったら早く帰った帰った」

「あ、あのもう一つ聞きたいことがあるんです！」

「アイズヴァレンシユタイン氏の情報ならもうないよ。今は諦め——」

「炎鳴流っていう格闘技で戦う人を知りませんか？」

第2話

「炎鳴流？うーん聞いたことないわね。どんな感じの人だったの？」

「えっと、ミノタウロスを一撃で倒してましたからかなり強い人だと思うんですけど……」
「なら少なくともLv. 3以上の冒険者だね……それに格闘で戦う冒険者。かなり条件があるから絞り込めるとは思うけどギルドからはあんまり話せないから期待しすぎないでね」

「……その、できればもう一度会いたいんです。会ってお礼をしたくて……」

「はあ……取り敢えず探しておくわね」

「エイナさん、大好きー!!ありがとー!」

☆

「へえ、オラリアかあ、初めて聞く島だなあ。」

私はあの洞窟から外に出てこの街について色々聞いていた。

迷宮都市オラリア。ダンジョンと呼ばれる地下迷宮があり、私達が普段戦っている魔物はそこでしか生まれず、ギルドと呼ばれる組織によつて魔物が街に出てくることを防がれてるそうさ。

しかしそれと相反するような存在がある。冒険者だ。冒険者はダンジョンに潜り魔物を倒すそうだが、そもそも魔物が街に来ないのだからわざわざ危険に飛び込む必要はないのだ。それでもダンジョンに潜り魔物を倒し、名誉や富を得たいという人がいるそうさ。

これを聞いたとき私の幼なじみのグランのことを思い出した。グランはお父さんから届いた手紙に書いてあった場所、イスタルシアと呼ばれる島を屈指している。しかしイスタルシアに向かうためには空図と呼ばれる地図が必要なのだ。それがなければ瘴流域に巻き込まれ空のそこに落とされ命はないと言われている。それでもイスタルシアに行つてみたいとグランは言っていた。

きつと冒険者もグランも本質は同じなのだろう。もしかしたらあの白髪の少年も「しかし、ここは一体どこら辺にある島なんだろう」

人々にいくら聞いてもそんなものは知らないと言を揃えていうばかりで空のその字も聞かない。

「うーん…船から落っこちてここまできちやったのかな？それとも罰ゲームか何かでこ

「ここに来させられた？」

思考を巡らせて行くうちにある考えにたどり着く。

「…お腹減った」

もう昼時になり、朝ご飯を抜いている私のお腹はペコペコだった。服を探り手持ちの金を確認してみる。3万ルピ、高級な料理のフルコースを満足に食べれるくらいの金額だ。

「…ちよつとくらい贅沢してもいいよね？」

そう呟きながら私は商店街に足を運んだ。

私は絶望した。まさか、まさか…ルピが使えないなんて。この島の貨幣はヴァリスと呼ばれるものでありルピなんて知らないと言われてしまった。

私からすれば、いや私達からすればヴァリスの存在のほうが知らないと言える。どこの島もルピを使っていたし、違う貨幣を使うということは貿易だつてできないのだ。

「ここであることが浮かんでくる。」

「…もしかして、星の民の影響を受けなかった島なの？」

私が今まで渡ってきたこの島も星の民がもっていた技術や星晶獣とよばれる守り神によって生活がなりたっていた。もちろんルピもそのひとつだった。しかしあるとき、覇空戦争によって星の民は姿を消したといわれている。

話を戻そう。どこの島も星の民の力なくしては生活するのは難しいと思う。でもここオラリアは独立して他の島からの影響を一切受けずに生活している。何故なのか？今の私にはまだわからず必死に考えてみるも…

『ぐうう〜』

腹の音がなってしまう。まだご飯を食べることが出来ず食事を買うヴァリスも持っていない。何かを売ればヴァリスが手に入るかもしれないと思ったがそもそも服以外に何も持っていないのだ。

…唯一ヴァリスも手に入れる方法が思い浮かんでくる。

「…あの子にかしてもらおう」

つまりは、『お前を助けたんだからちよつとくらい金よこせよ』ということだ。本来騎士空士は困っている人を助けるのが仕事だが恩にさせて金を要求するというのは心が痛む、

『ぐうううう〜』

さつきよりも大きくお腹の音がなる。

痛むのは心だけではなくお腹もだった。

「背は腹に変えられないか…仕方ない」

私はさっきの少年が走って行った場所に向かって歩き始めた。

少年の通った道を歩き続けて十分程したところで大きな建物を見つける。掲げられた看板には『ギルド』と書いてある。

一体何の建物なのかは検討もつかないが人々が入り出しているのが公共施設のだろうと予測してみる。誰かに聞いてみようと思い、ギルドの出入り口から人が出てくる。

「あの、すいません。この建物って…ええ!？」

「うえ!？」

出てきた人物はさつき出会ったばかりの白髪の少年だった。



「え、えっと、その…助けてくれてありがとうございます!？」

「どういたしましてかな。…そのちよつと悪いんだけどお願いを聞いてくれないかな

「？」

「は、はい！僕に出来ることならなんでも！」

「お金貸してくれない？」

「…え？」

しまった…あまりにお腹が減ってるせいで頭が回ってない。これではただのカツアゲにしか見えない…

「あ、いや変なこと言つてごめん。お腹が減ってるんだけどお金がなくてさ」

馬鹿か私は。これではまるで『助けてやっただから飯奢れ』とっているようなものではないか。しかもこの子は目を丸くして『何を言ってるんだこいつは』って顔をしてる。

「ご、ご飯を奢ればいいんですか？たくさんとは言えないですけど少しだけなら大丈夫です」

「本当に?! ありがとうね！」

少年の手を取り、顔を近づける。改めて見ると白髪と赤い目のせいで兎のような印象を感じる。

「そ、その！近いです！」

少年は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。どうにもがつつき過ぎていたようだ。

「あ、ごめんね。」

手を放し少し下がる。少年の顔はまだ赤いままである。

「よし、それじゃあご飯食べに行こう！」

「あ、あの！その名前を聞いてもいいですか？」

「私？」

「私の名前はジータだよ。君は？」

「ぼ、僕はベル。ベル・クラネルです」

第3話

「えっとベル君？それで私達はどこに向かつてるの？」

「僕のホームですよ。多分神様もいるでしょうし一緒に食べましょうよ」

（カミサマ？どうな人なんだろ）

「あ、見えてきました。あれが僕のホームです！」

ベルは少し先にある壊れかけの協会に向かつて指をさす。私の勘違いではないかと思つたがとりにある建物は物置のようなボロボロの木で出来た建物しかなかった。

「この協会が僕のホームなんですよ」

「…と、とても個人的だね」

間近で見るとさらにボロボロなのがわかる。ホコリや蜘蛛の巣が張られ壁がところどころ欠けているように見える。

ホコリがたまつた長椅子を通り抜けて、私達はさらに奥にある地下の部屋に入つていく。

「神様ー！ただいまー！」

「おかえりい！！ベル君！」

部屋の中にいたのはとても小柄で一見ドラフかと思つたが特徴である角がないことからハーヴェイン族なのではないかと思う。

「えつとベル君、この人がカミサマ？」

「…誰だい君は？」

何故か睨まれてしまった。解せぬ

「こ、この人は僕の命の恩人なんです！ミノタウロスに殺されそうになってるところを助けてもらつたんです!!」

「なあ!?君はミノタウロスに出会つたのか！」

(随分と騒がしい人達だなあ…)

「それでジータ君、改めて礼を言うよ。僕の家族を助けてくれて本当にありがとう」「いえいえ、こちらこそありがとうございます。こんなにご飯を食べさせて貰つちやつて」

あれからベル君に私のことをカミサマに紹介してもらいそのお礼としてご飯を貰うことになった。とても優雅とは言い難い食事ではあつたがお腹の減つていた私にとつ

てはとても美味しかった。

「そういえばジータさんは何処のファミアリアに所属しているんですか？ 凄く強いからロキ・ファミアリアだと思ってたんですけど…」

「ファミアリア？ 騎空団なら入っているけどファミアリアなんて入ってないよ」

「ええっ!?! ファミアリアに入ってない!?!」

(…やっぱり騒がしいなあ)

「神の恩恵を持たないでミノタウロスを倒すなんて!?! そんな人聞いたことありませんよ!?!」

「うーんあれくらいの手相手はいつも相手にしてきたからなあ…」

「い、いつもって…君はどんなことをしてきたんだい?」

「旅かなあ…島を渡っているんな魔物と戦ってきたしね」

「ど、どこのファミアリアにも入ってないらうちのファミアリアに入りませんか!?!」

「うーん…正直私は行きたい場所があるからこの街に留まるつもりはないんだよね」

「……………ジータ君、お願いだ。どうか僕のファミリアに入ってくれてベル君の助けになってくれないか」

「か、神様?!なにを!?!」

神様は正座の状態になり、そこから頭を地面にこすり付ける。いわゆる土下座といやつだ。お願いをするときや謝るとき姿勢だと聞いたことがある。

「や、やめてください。そんな事言われても…」

「お願いだ!ずっとここにいてくれなんて言わない!少しでもいい!ベル君が強くなるまで手伝って欲しいんだ!」

「うっ…そういう風にいわれると」

「僕は…僕は家族を失いたくないんだ!」

神様の叫びが心に響く。

ああ、そうか。

私にもわかるのだこの気持ちだ。

私も家族を失ってしまったから。

私の両親は幼い頃に魔物に殺されてしまった。

私も家族を、仲間を失いたくないのだ。

グラン、ルリア、カタリナ、ラカム、イオ、オイゲン、ロゼツタ、みんな大切な存在だから。

だから私にもわかる。失いたくない気持ちだが。なら私がやることは…

「……そんな事言われて、断れるわけないじゃないですか」

「ほ、本当かい!？」

「でもずっとはいられないですよ。私にもやらなくちゃいけないことがありますから」

「それでも構わないよ。…少しでもいい、ベル君を強くしてやってほしいんだ」

「…わかりました。その依頼受けます!」

「どうかよろしく頼むよ」

「え、えつと、よろしくお願います!!」

「うん、よろしくね!ベル君!神様!」

「それで、そのファミアアってのはどうやって入るの？」

2人は壮大にズッコケてしまった。

「ど、どうやら君は相当な物知らずなんだね」

「えつとジータさんはここに来たのは今日が初めてなんですよね」

「うん、そうだね。気がついたらあのダンジョンってどこにいてさ」

「気がついたらダンジョンに!? 君は一体何をしているんだい!？」

「それが私にもさっぱりで……」

「……まあそれは一旦置いておこう。先にファミアアについて説明しておこう」

ある程度話を聞き私なりにまとめてみる。

ファミアアとは特定の神様から神の恩恵ファアルナを受けた人間の集まりだそうだ。

神の恩恵というのは一言でいうと普段やっていることを経験値とし、それを神様が能力に変える。これで誰もが簡単に強くなる事が出来るというのだ。

そして私が入るファミリア、ヘスティアファミリアは目の前にいる神ヘスティアから神の恩恵を受けた者達のファミリアということだ。メンバーはベル君と私だけだ。

「うん、大体は理解したよ。つまり神の恩恵を受けてベル君の手伝いをするってことでいいのかな？」

「うん、じゃあさっそく神の恩恵を与えるからそのソファに寝てくれないかな。あと服を脱いでね」

「はい、服を脱いでソファに…って服を脱ぐ!?!」

「当然じゃないか。神の恩恵を与えるのは直接背中に触れないといけないんだからね」

ふ、服を脱ぐ。神様は女性だからまだいい。しかしそこにいる少年は…

「…わあああああ!!すいませエンんん!!」

顔を真っ赤にして部屋から出て行ったようだ。これで少し安心した。

「はあ、まったくベル君たら。じゃあやるからね」

私は指示に従って服を脱いでソファにうつ伏せになる。その上に神様が乗ってくる。

神様は人さし指に針を刺し、血が背中に垂れてくる。すると背中に文字が浮かび上がってくる。

「……………」

「どうしたんですか？」

顔を振り向いて神様の顔を伺ってみる。見えたのは口を開きっぱなしでとても驚愕しているのがわかる。一体何があつたのだろうか？

ジータ

Lv. 10

力：???

耐久：???

器用：???

敏捷：???

魔力：???

《魔法》

《スキル》

【遙かなる青】
グランブルー

- ・所持する武器によってステータスが変化
- ・強力な武器ほどステータスが向上する

【アビリティ】

- ・所持する武器、防具によって魔法が3つまで発動可能になる

【EXアビリティ】

- ・所持する武器に関係なく魔法が発動可能になる

【ゼニス・パーク】

- ・所持する武器が得意武器のとき特殊な魔法が発動可能になる

- ・所持する武器が得意武器のときステイタスが向上する

- ・魔法が5つまで発動可能になる

【ゼニス・ストライプ】

- ・ステイタスが大幅に向上

- ・ステイタスの限界突破

第4話

(な、なんだこのステイタスは!?)

ヘステイアが与えた神の恩恵によって具現化されたジータのステイタス。しかしそのステイタスをはっきり言つて異常だった。

(Lv. 10!?!スキルが5つ!?!魔法が5つ使える!?!こんなステイタス聞いたことないぞ!?)

このオラリアにて最高レベルは7であり、唯一人だけ。「フレイヤ・ファミリア」の猛者と呼ばれたオツタルだ。しかし目の前の少女はそのさらに上、Lv. 10を叩きだしたのだ。

本来レベルは大きな敵や試練を乗り越えることによつてレベルが上昇する。仮に神の恩恵をもらつていなくてもランクアップ自体は可能だが能力の向上率はまるで違ふし、ステイタスはあまり伸びないのだ。

(それにスキルが5つ…全部聞いたことがない。それにこの『遥かなる青』、持つ武器によつてステイタスが変わるだなんてイレギュラー過ぎるぞ!)

ステイタスは日常の中で産まれる経験値を汲み取り神の力によつてステイタスにな

り、力や敏捷などの能力が向上するのが一般的だ。

しかし、というかやはりこの少女だけは違う。持つ武器にステイタスが依存されるのだ。弱い武器を持てばステイタスが下がり、強い武器であればステイタスが上がる。

つまりは神の力に頼らず武器を変えるだけで強くなれるのだ。

(いったいなんなんだ!? 僕のしってる人間じゃないぞ!?)

「あゝ」

(レベルもステイタスもスキルもまるで聞いたことがないし、魔法が5つも使えるなんて)

「あ の つ !!」

「う ひ や あ つ !!」

「あの、私のステイタスが何か変だったんですが…?」

「い、いや何も問題な、ないよ。」

(変だよ!! こんなに変なの見たことないくらいにね!)

「は、はあ。それならいいんですけど」

(マズイマズイ! もしこんなのが他の神に広まったら…確実におもちゃにされて遊ばれるに決まってる!)

「…いいかいジータ君、これから君のステイタスを渡すよ。でもこのステイタスを決し

て誰かに言っちゃいけない」

「…はい」

「…それじゃあ君のステイタスを渡すよ」

ジータ

L v. 1

力： 716

耐久： 467

器用： 690

敏捷： 618

魔力： 120

《魔法》

《スキル》

「…えーつとこれって高いんですか？」

「た、高いほうだよ！ジータ君は旅をしてきたんだらう？それもあつて元から高いのさ」
へステイアの取った行動はジータに嘘のステイタスを渡し誰にも知らせずに隠し通

すことにしたのだ。いずれはバレるかもしれないが彼女に伝えてしまえば嘘をついてると見抜かれてしまう可能性もある。それなら最初から伝えないということにしたのだ。

「L v. 1 かあ：そういうえばベル君は何レベなんです？」

「ベル君も君と同じL v. 1 だよ。でもステイタスの高さは君のほうが上かな」

「ふーん。じゃあ私のほうがお姉さんってことだね」

「お姉さん？…まあそういうことになるね。とにかくベル君をよろしく頼むよ。今は君だけが頼りなんだ」

「ふふっ。任せてください！」

「神様にジータさん…まだ終わらないのかなあ」

—— 翌朝 ——

「おはようございます、ジータさん」

「おはよう、ベル君。じゃあ早速行こうか」 ギルド「つてところに」

ギルドとはダンジョンの運営を仕事とし冒険者の登録や魔石の換金、アドバイスなど、冒険者にとって必須の存在である。

これから私は冒険者として認められダンジョンで戦うことが許される。といつても今まで騎空士として戦ってきたので今更な話だが、この街でベル君の助けをする以上仕方無いことなのだろう。

「あ、着きましたよ！ここがギルドです！」

目の前にある大きな建物。昨日見たばかりだがまだ早朝なせいかほとんど人がいない。というか私達しかいない。そもそもこんな時間からギルドはやっているのか気になるところだが…

「あれ、ベル君？こんなに朝早くからどうしたの？」

「エ、エイナさん!?何でここに?」

声をかけてきた女性は私よりも少し背が高く、耳が長く尖っている。エルーン族かと思ったが特徴である獣耳が見当たらないのだ。

昨日、神様を始めて見たとき背の小ささと胸の大きさからドラフ族かと思ったが違っていたように、ここの街の人々はどこか違う気がする。……まあただの文化の違いというものだろう。

「ベル君こそ。こんな朝早くから何してるの？もしかしてまたダンジョンに行くきなの」

「違いますよ！いや違うはないんですけど。今日はジータさんの冒険者登録をしに来て」

「初めまして。ジータです。ベル君と同じ【ヘステイア・ファミリア】に所属したので冒険者登録にきたんです」

「…へっ？」

「実は神様からベル君を助けて欲しいって頼まれたんです。ですから冒険者登録をしておこうと思って…」

「…うん、まあ話はわかったわ。とりあえずギルドのカウンターに話をすれば登録できるわよ」

「ありがとうございますね。それじゃあ失礼します」

「…うん、頑張つてね」

エイナと呼ばれてた女性は頭を抑えて何処かへ行ってしまった。具合でも悪いのだろうか。

とりあえずギルドのカウンターに向かうことにした。